

「クラシック・ロック」考

山 田 晴 通

はじめに

「クラシック・ロック」という概念がある。英語では「classic rock」ということになる。ところが、この言葉が一つの音楽ジャンルの名称としてどのような広がりをもつか、あるいは、記号表現(シニフィアン)としての「クラシック・ロック」が、いかなる記号内容(シニフィエ)をもつのかといったことを考え出すと、議論はかなり混乱し、しばしば空転することになる。もちろん、そのような事態は、程度の多少の違いはあれ、数多くの音楽ジャンル名称にもついて回るものであるが、「クラシック・ロック」をめぐる言説は、まさに現在進行形で事態が展開している感が強い。本稿はこのような状況認識に立ち、客観的な観点から、「クラシック・ロック」をめぐる様々な言説を整理し、この表現が指示する記号内容に見られる相違点なり認識のズレを明らかにする作業を通して、「クラシック・ロック」という概念を支えている着想なり、思想性を素描することを目指すものである。

「クラシック・ロック」とは何か

小倉隆一郎は、「クラシックロックの系譜 ロック音楽の誕生からビートルズへ」と題された講演記録で、次のように述べている。「普通クラシックと申しますと、モーツァルトやベートーヴェン等の「クラシック音楽」を指します。ただ、ここではクラシックロックを、「古典的なロック」あるいは「ロックの古典」という意味で使いたいと思います。」「何年から何年までをクラシックロックと呼ぶかという明確な定義はありません。… 私は … 1955 年のロック誕生から、1980 年代までのロック音楽を「クラシックロック」と呼んでいます。」¹⁾この小倉の用語法は、ロックンロールの草創期まで対象の範囲を広げるものであり、後段で検討する他の論者の議論に比べると、かなり独自の見解であるように見える。

増田聡(2005, p.51)は、クラシック音楽的な言説の支配構造がポピュラー音楽にも及んでいることを指摘する論文の中で、「「クラシック・ロック」という言葉がある。この言葉を音楽大学の(ちょっとお堅い)先生や学生の前で出すと一笑に付されるか、あるいは「オーケストラを使ったロックのことですか?」と真面目な顔で訊ねられる。」²⁾と述べた上で、「いうまでもなく、「クラシック・ロック」(あるいは「ロック・クラシック」)とは、一九六〇年代から七〇年代にかけてのロック黄金時代(とされる時代)の名作群、具体名

をあげるならば、ボブ・ディラン『ブロンド・オン・ブロンド』、ビートルズ『サージャーント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』、レッド・ツェッペリン『レッド・ツェッペリン II』、ローリング・ストーンズ『メインストリートのならず者』、…」と挙例している(増田、2005、p.51)。ここで増田は「一九六〇年代から七〇年代にかけてのロック黄金時代(とされる時代)」と述べているが、そこで挙例されているアルバムの発表年は、1966年、1967年、1969年、1972年と、1960年代後半から1970年代初頭の、より短い期間に集中している。

タワーレコードのフリーペーパー『bounce』の編集を長らく務めた内田暁男は、吉田勉のインタビューに応える形で、2017年に「いま聴きたい「クラシックロック」10選」と題して、アルバム10点を挙げている³⁾。発表年代順に列挙すると、ドアーズ『ハートに火をつけて (The Doors)』(1967年)、ビートルズ『ザ・ビートルズ (The Beatles)』(1968年)、ピンク・フロイド『原子心母 (Atom Heart Mother)』(1970年)、キャロル・キング『つづれおり (Tapestry)』(1971年)、デヴィッド・ボウイ『ダイヤモンドの犬 (Diamond Dogs)』(1974年)、ザ・ジャム『イン・ザ・シティ (In The City)』(1977年)、テレヴィジョン『マーキー・ムーン (Marquee Moon)』(1977年)、ドナルド・フェイゲン『ナイトフライ (The Nightfly)』(1982年)、ザ・スミス『ザ・クイーン・イズ・デッド (The Queen Is Dead)』(1986年)、プリンス『パレード (Parade)』(1986年)である。時期としては1960年代半ばから1980年代半ばであり、記事の冒頭でも、「今回は、The Beatlesがデビューした60年代前半から、グランジ前夜となる80年代後半までに期間を定め、色褪せない輝きを放つ作品を10枚紹介。」と謳われてる。

インターネット上には、英語圏のサイトでクラシック・ロックに関わるランキングを紹介しているものが複数ある。例えば、Ranker.comのサイトには、閲覧者による投票と専門的音楽評論家の意見を加味したランキングとして「The Greatest Classic Rock Bands」という100組のバンドや個人アーティストのランキングを公表している。そこでは、「List Rules」として「Rock artists who got their start in the 1960s or 70s」と記しているにも関わらず、1950年代にデビューしているエルヴィス・プレスリーやチャック・ベリーらもランク入りしており、他方では1980年にデビューしたU2などもランク入りしている⁴⁾。

また、これとは別に、Ultimate Classic Rock というサイトが、「Top 100 Classic Rock Songs」として、アーティストないしバンドごとに1曲を挙げる形で100曲の「クラシック・ロック・ソング」をランキングしている⁵⁾。

この二つのランキングを比較すると、64組のアーティストないしバンドが重複しているが、一方のランキングにだけ登場するものが、それぞれ36組あるため、二つのリストで言及されているものの総数は延べ136組となる。これらを「The Greatest Classic Rock Bands」における順序により、次いで「The Greatest Classic Rock Bands」において選外となっている者について「Top 100 Classic Rock Songs」における順序によって一覧を作成し、加えてアーティストないしバンドの出身地を国別に表示した⁶⁾。[表1]

表1 Ranker と Ultimate Classic Rock によるクラシック・ロックの代表的バンド

Ranker による The Greatest Classic Rock Bands	Ultimate Classic Rock による Top 100 Classic Rock Songs	
1 Led Zeppelin	<2> Kashmir (1975)	英
2 The Beatles	<5> A Day in the Life (1967)	英
3 Queen	<7> Bohemian Rhapsody (1975)	英
4 Pink Floyd	<9> Comfortably Numb (1979)	英
5 The Rolling Stones	<3> Gimme Shelter (1969)	英
6 The Who	<11> Baba ÓRiley (1971)	英
7 The Doors	<18> L.A Woman (1971)	米
8 The Jimi Hendrix Experience	<6> All Along The Watchtower (1968)	英米
9 AC/DC	<4> Back In Black (1980)	豪英
10 Eagles	<20> Hotel California (1976)	米
11 Creedence Clearwater Revival	<15> Fortunate Son (1969)	米
12 Aerosmith	<1> Sweet Emotion (1975)	米
13 Black Sabbath	<10> Paranoid (1970)	英
14 Lynyrd Skynyrd	<14> Sweet Home Alabama (1974)	米
15 Cream	<33> Sunshine of Your Love (1967)	英
16 Deep Purple	<32> Smoke on the Water (1972)	英
17 Fleetwood Mac	<40> Go Your Own Way (1977)	英米
18 Van Halen	<8> Everybody Wants Some!! (1980)	米
19 David Bowie	<29> Space Odity (1969)	英
20 Eric Clapton	<43> Cocaine (1977)	英
21 ZZ Top	<19> La Grange (1973)	米
22 The Kinks	<59> You Really Got Me (1964)	英
23 Rush	<68> Tom Sawyer (1981)	加
24 Journey	<13> Don't Stop Believin (1981)	米
25 The Beach Boys		米
26 The Police	<51> Roxanne (1978)	英
27 Tom Petty and the Heartbreakers		米
28 Boston	<28> More Than a Feeling (1976)	米
29 Santana		米
30 The Allman Brothers Band	<36> Rablin' Man (1973)	米
31 Foreigner	<72> Juke Box Hero (1981)	米
32 Elton John	<37> Rocket Man (1972)	英
33 Genesis		英
34 Crosby, Stills, Nash & Young	<30> Suite: Judy Blue Eyes (CSN) (1969)	米英
35 Bad Company	<42> Feel Like Makin' Love (1975)	英
36 Heart	<41> Barracuda (1977)	米
37 Electric Light Orchestra		英
38 Jethro Tull		英
39 The Arcana		英
40 Bob Seger & the Silver Bullet Band	<22> Turn The Page (1973)	米
41 Dire Straits	<39> Sultans Of Swing (1978)	英
42 Alice Cooper	<45> School's Out (1972)	米
43 Simon and Garfunkel		米
44 Steve Miller Band	<58> The Joker (1973)	米
45 John Lennon	<23> Imagine (1973)	英

Ranker による The Greatest Classic Rock Bands	Ultimate Classic Rock による Top 100 Classic Rock Songs	
46 Def Leppard	<55> Photograph (1983)	英
47 Kiss	<26> Rock And Roll All Nite (1975)	米
48 Elvis Presley		米
49 Blue Öyster Cult	<53> Don't Fear the Reaper (1976)	米
50 Neil Young	<34> Rockin' in the Free World (1989)	加
51 Styx		米
52 Chicago		米
53 Scorpions	<98> Rock You Like A Hurricane (1984)	独
54 Yes	<88> Roundabout (1971)	英
55 Supertramp		英
56 Stevie Ray Vaughan		米
57 The Cars	<35> Just What I Needed (1978)	米
58 Kansas		米
59 Bruce Springsteen	<16> Born To Run (1975)	米
60 Iron Maiden		英
61 Janis Joplin	<71> Piece Of My Heart (1968)	米
62 The Doobie Brothers	<49> Black Water (1975)	米
63 The Moody Blues		英
64 Jefferson Airplane	<80> Somebody To Love (1967)	米
65 Paul McCartney	<38> Live and Let Die (1991)	英
66 Billy Joel	<63> Piano Man (1973)	米
67 Cheap Trick	<44> I Want You To Want Me (1978)	米
68 Steely Dan		米
69 Ozzy Osbourne	<17> Crazy Train (1980)	英
70 Tom Petty	<25> Free Fallin' (1989)	米
71 U2		愛
72 Bon Jovi		米
73 Chuck Berry		米
74 Bob Dylan	<21> Like a Rolling Stone (1965)	米
75 Blondie		米
76 Steppenwolf	<86> Born To Be Wild (1968)	加
77 Johnny Cash		米
78 The Byrds		米
79 Stevie Nicks	<64> Edge of Seventeen (1981)	米
80 REO Speedwagon		米
81 Stevie Ray Vaughan and Double Trouble	<61>Pride And Joy (1983)	米
82 Grand Funk Railroad	<92>Wére an American Band (1973)	米
83 The Band		加米
84 Van Morrison		英
85 The Guess Who	<52> American Woman (1970)	加
86 The Yardbirds		英
87 Ray Charles		米
88 Judas Priest	<46> Livin' After Midnight (1980)	英
89 Pat Benatar		米
90 Joe Cocker		英
91 Rainbow		英
92 Joan Jett		米

Ranker による The Greatest Classic Rock Bands	Ultimate Classic Rock による Top 100 Classic Rock Songs	
93 Bachman- Turner Overdrive	<65> You Ain't Seen Nothin' Yet (1974)	加
94 Rod Stewart	<69> Maggie May (1971)	英
95 The Mamas & the Papas		米
96 The Clash		英
97 Grateful Dead		米
98 Nazareth	<76> Hear of the Dog (1975)	英
99 Free	<54> All Right Now (1970)	英
100 Buddy Holly		米
NA Guns N Roses	<12> Sweet Child O' Mine (1987)	米
NA Ted Nugent	<24> Stranglehold (1975)	米
NA Derek and the Dominos	<27> Layla (1971)	英
NA Metallica	<31> Enter Sandman (1991)	米
NA Thin Lizzy	<47> The Boys Are Back In Town (1976)	愛
NA Peter Frampton	<50> Show Me The Way (1975)	英
NA George Harrison	<56> My Sweet Lord (1970)	英
NA Joe Walsh	<57> Rocky Mountain Way (1973)	米
NA Foghat	<60> Slow Ride (1975)	英
NA Golden Earring	<62> Radar Love (1973)	蘭
NA Phil Collins	<66> In The Air Tonight (1981)	英
NA Mötley Crüe	<67> Home Sweet Home (1985)	米
NA Don Henley	<68> The Boys of Summer (1984)	米
NA Talking Heads	<70> Burning Down The House (1983)	米
NA Lou Reed	<73> Walk On The Wild Side (1972)	米
NA Manfred Mann' s Earth Band	<74>Blinded By the Light (1976)	英
NA Buffalo Springfield	<75>For What It's Worth (1967)	加米
NA Mountain	<77>Mississippi Queen (1970)	米
NA America	<78> A Horse With No Name (1971)	英
NA Pete Townshend	<79>Let My Love Open The Door (1980)	英
NA T.Rex	<81> Bang A Gong (Get It On) (1971)	英
NA The Animals	<82> House Of The Rising Sun (1964)	英
NA The Pretenders	<83> Brass In Pocket (1980)	英米
NA The James Gang	<84> Funk#49(1970)	米
NA Marshall Tucker Band	<85> Can't You See (1980)	米
NA War	<87> Low Rider (1975)	米
NA John Cougar	<89> Jack & Diane (1982)	米
NA Ram Jam	<90> Black Betty (1977)	米
NA 38 Special	<91> Hold On Loosely (1973)	米
NA George Thorogood	<93> Bad To The Bones (1982)	米
NA Blind Faith	<94> Can't Find My Way Home (1969)	英
NA Styx	<95> Renegade (1978)	米
NA Molly Hatchet	<96> Flirting With Disaster (1979)	米
NA Electric Light Orchestra	<97> Don't Brig Me Down (1979)	英
NA Kansas	<99> Carry On Wayward Son (1976)	米
NA Sammy Hagar	<100> I Can't Drive 55 (1984)	米

表2 Ranker と Ultimate Classic Rock による代表的バンドの国籍

国	両方に掲載	Ranker のみ	Ultimate Classic Rock のみ
連合王国	25	12	12
アメリカ合衆国	29	22	20
その他	10	2	4
計	64	36	36

表3 Ranker と Ultimate Classic Rock による代表的バンドのトップ10

Ranker による The Greatest Classic Rock Bands		
1	Led Zeppelin	英
2	The Beatles	英
3	Queen	英
4	Pink Floyd	英
5	The Rolling Stones	英
6	The Who	英
7	The Doors	米
8	The Jimi Hendrix Experience	英米
9	AC/DC	豪英
10	Eagles	米

Ultimate Classic Rock による Top 100 Classic Rock Songs		
1	Aerosmith	米
2	Led Zeppelin	英
3	The Rolling Stones	英
4	AC/DC	豪英
5	The Beatles	英
6	The Jimi Hendrix Experience	英米
7	Queen	英
8	The Who	英
9	Pink Floyd	英
10	Black Sabbath	英

この一覧に基づいて、掲載されたリストと出身国によって集計すると、取り上げられたアーティストやバンドの数では米国が優勢であるものの一定の比重で英国勢が目立った存在感を見せていることがわかる。そもそも米国と英国の人口に5倍以上の格差があることを考慮すれば、いかに英国勢の存在感が大きいか理解されるだろう。[表2]

特に、それぞれのランキングで最上位に挙げられた10組を見ると、英国勢の優位が顕著に見て取れる。これは、1960年代がビートルズの爆発的成功に始まる、いわゆる(第一次)ブリティッシュ・インヴェイジョンの時代であり⁷⁾、その後も米国の市場が英国のアーティスト達に注目し続けたという事情を反映したものと差しあたりは理解できよう。[表3]

英国には、『Classic Rock』と題された音楽雑誌があり、1998年に創刊され、一時休刊したり、経営権が移った時期を挟みながら、現在は月刊誌として『New Music Express』誌を上回る部数を誇っている⁸⁾。同誌は、2006年から2016年まで「Classic Rock Roll of Honor Awards」というイベントを行っていた⁹⁾。そこでは新人バンドに授与されるカテゴリーである「Best New Band」もあったが、年次によって異同があるそれ以外の各賞は、ほとんどの場合、音楽業界での経歴が長いベテランに授与されている。また「Metal Guru」という賞が設けられているように、ヘヴィ・メタルも対象に含まれているが、いわば「別物」として扱われていることがわかる¹⁰⁾。

歴代の受賞者で、「Best New Band」に挙げられた2000年代から2010年代にデビュー

したバンドである、ジ・アンサー、ロードスター、ブラック・ストーン・チェリー、エア・ボーン、チキンフット、ザ・ユニオン、ヴィンテージ・トラブル、トレイサー、ザ・テンペラチャー・ムーヴメント、ザ・キャディラック・スリー、ウィー・アー・ハーロット、ザ・ストラッツや、もっぱらプロデューサー、マネジメントなど裏方的な仕事をする音楽関係者に授与される「The Inspiration Award」、「The V.I.P.」などの受賞者を別にしても、上記の134組から漏れている各賞の受賞者は、少なくない。

具体的に、概ね受賞年次順に列挙すると、ジェフ・ベック、ビリー・アイドル、アーサー・ブラウン、レミー・キルミスター（モーターヘッド）、ホワイトスネイク、ニューヨーク・ドールズ、ロニー・ジェイムス・ディオ、フランク・ザッパ、ポーキュパイン・トゥリー、ステイタス・クォー、ジェフ・ウェイン、ミートローフ、ヘヴン・アンド・ヘル、フー・ファイターズ、MC5、ブライアン・アダムス、アンヴィル、ビフ・バイフォード（サクソン）、ドリーム・シアター、スティーヴ・ハーレイ（コックニー・レベル）、ジョー・ボナマッサ、イギー・ポップ、イメルダ・メイ、マイケル・シェンカー、キリング・ジョーク、ロイ・ウッド、マイケル・モンロー（ハノイ・ロックス）、ブラック・カントリー・コミュニオン、マニック・ストリート・プリーチャーズ、スティーヴ・マリオット、スティーヴ・ウィンウッド、ライヴァル・サンズ、ファミリー、ラス・バラード、ダムド、アンスラックス、ザ・ヴァージンメアリーズ、ウィルコ・ジョンソン（ドクター・フィールグッド）、ジョン・メイオール、ロリー・ギャラガー、ザ・ダークネス、クイーン＋アダム・ランバート、ジェフ・リン、デイヴ・ムステイン（メガデス）、ヨーロップ、ノディ・ホルダー（スレイド）、ONE OK ROCK、BAND-MAID、YOSHIKI、サラ・ヘロニモの合わせて50組が、これに当たる。中には、ジェフ・ベックのように2008年に「Outstanding Contribution」、2011年に「Living Legend」、2016年に「Icon Award」と、複数回受賞している例もある。

最後の方に日本のバンドや、フィリピンの歌手サラ・ヘロニモが集中して言及されているのは、2016年のこのイベントが東京で開催され、通常の賞に加え「Eastern Breakthrough Male Band」、「Japan Next Generation prize」、「Asian Icon Award」、「Best Asian Performer」などの各賞が追加されたためである¹¹⁾。これらを含め、また、新人バンドを対象とする「Best New Band」などの受賞者は別として、上述の136組に入っていない50組のアーティストが何らかの受賞をしたこととなる¹²⁾。何らかの賞を受賞したバンドなりアーティストをレコード・デビューのタイミングや、出身国別に集計すると分類すると、1980年代以降における「クラシック・ロック」の位置付けがある程度示唆される。[表4]

50組の7割は、1970年代までにデビューを果たしており、受賞者の半数は英国人、ないし、英国のグループによって占められている。もちろん、これには主催する雑誌が英国の雑誌であることを考慮しておくべきであろうが、他方でこの授賞式イベントが、長らくロンドンで開催された後、2014年にはロサンゼルスで、2016年には東京で開催されるな

表4 134 曲リスト外のクラシック・ロック受賞アーティスト、バンドのデビュー時期と国籍

国	1979 年以前	1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代	計
連合王国	22	2	0	1	0	25
アメリカ合衆国	8	2	1	2	0	13
その他	6	1	0	3	2	12
計	36	5	1	6	2	50

ど、主催者側が一定の国際化路線をもっているものと思われることには注意しておくべきであろう。

このように、クラシック・ロックをいう表現が指し示す範囲、特に歴史的な区分が千差万別なものとなり得ることは、本稿の冒頭でも述べたとおりである。問題は、なぜその時代を「クラシック＝古典期」と捉える感覚が成立したのかというところにあるが、そうした議論の補助線として、次に米国における。ラジオ・フォーマットとしての「クラシック・ロック」について検討しておこう。

ラジオ・フォーマットとしての「クラシック・ロック」

「クラシック・ロック」という表現は、もともとラジオ・フォーマットの名称の一つとして米国で成立し、普及が進んだ表現とされている。ロイ・シューカー (Shuker, 2016) によれば、それまでシングル盤を中心に放送していたラジオで、シングル化されていないアルバム収録曲を取り上げて放送する試みが 1960 年代後半から一部の先進的な局で行われるようになり、1970 年代半ばには、それがアルバム・オリエンテッド・ラジオ (AOR) という一つのフォーマットとして確立されたのだという¹³⁾。このフォーマットは、シングル盤に収まりきらない大曲志向をもっていたプログレッシブ・ロックなどと相性が良かった。そこから更にクラシック・ロック・フォーマットへの移行がどのように生じたのかをめぐっては、様々な異説もあるが、1981 年には、フィラデルフィアの FM 局 WYSP (後の WIP-FM) が「classic rock」を最初に標榜したとされ、以降数年のうちにこのフォーマットが各地に普及していった。その背景には、FM ラジオ放送局に関する規制緩和政策によってラジオ局の数が増加するという事情があったという (Shuker, 2016, pp.141-142)。こうした事情は、規制緩和でラジオ局が増え、広告市場における競争が厳しくなるにつれ、ニッチ市場を狙い、低コストで運営できる手法を編み出す局が出現するという、ピーターソン (1990=2005, pp.142-143, 147, 149-150) が、1950 年代について指摘した状況と同様の構造があった。

ニッチ市場とはいえ、クラシック・ロック局が主なターゲットとする層は米国の文脈におけるベビーブーマーであり、それ相当のボリューム・ゾーンでもある。米国の文脈におけるベビーブームは、日本におけるものより範囲が広く、1946 年から 1959 年ごろとされ

る。彼らは、1970年の時点で11歳から24歳の若者たちであったが、1985年の時点では26歳から39歳になっていた。可処分所得という観点から見れば、一定の余裕をもつ身になっていたということになる。

もう一つ見落とせないのは、1980年代に音盤の規格がアナログ盤からCD(コンパクト・ディスク)に移行したことである。規格の変化によって旧譜の再発需要が発生し、リマスター盤や編集盤も含め、1980年代後半から1990年代には多様なCDが市場に供給され、大規模小売店の隆盛を見た。CDの製造工程の技術的進歩も著しく、製造コストは徐々に圧縮され、それに伴って旧譜の再発や編集盤の企画に必要な販売見込みの枚数も劇的に低下した。1960年代、1970年代の若者たちは、既にある程度の経済的余裕をもつ大人になっており、アナログ盤で愛聴していた音盤を新たにCDで再購入したり、かつては手が出せなかったものや、新たに編集盤として出されたレア音源を含む盤などをCDで購入することができた。いわゆるロングテール需要への対応は、アナログ盤よりCDの方が容易であった。ラジオ・フォーマットとしてのクラシック・ロック局は、こうした旧譜の売れ行きに大きく貢献したことであろう。

ラジオ・フォーマットとしてのクラシック・ロック局が取り上げる対象についても、必ずしも統一的な見解はない。シューカー (Shuker, 2016, p.141)は、「ビートルズから1970年代末まで (from the Beatles to the end of the 1970s)」とし、さらに白人男性による演奏がもっぱら取り上げられていることを指摘している。そこで流される楽曲は、英国のハード・ロックやプログレッシブ・ロックが中心であり、特にローリング・ストーンズ、ザ・フー、ピンク・フロイド、レッド・ツェッペリン、クリームが好まれ、米国のアーティストではジミ・ヘンドリックス、クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル、レーナード・スキナード、さらに英米混成のフリーウッド・マックなどが中心となっているという (Shuker, 2016, p.142)。この辺りは、前章で確認した内容とよく合致する。

他方で、シューカーは、何がクラシック・ロック局で放送されないかについても言及している。キッスやグランド・ファンク・レイルロードは、同時代において商業的に大きな成功を収めていたにもかかわらず、今日のクラシック・ロック局で取り上げられることは稀であり、黒人系の音楽は、同時代のロックとの接点があっても取り上げられることはないと言及し、スライ・アンド・ファミリー・ストーンやジェイムズ・ブラウンを例示している (Shuker, 2016, p.142)。このあたりの議論の前半、キッスやグランド・ファンク・レイルロードへの言及は、前章で示したように必ずしも当たっていないが、同じ白人と黒人の混成バンドでも、白人中心のオールマン・ブラザーズ・バンドがクラシック・ロックとして取り上げられながら、スライ・アンド・ファミリー・ストーンが除外されるという点は注意しておくべきだろう。また、単純に「黒人」と言いにくい面もあるとはいえ、ジミ・ヘンドリックスの存在がいかに突出していたかについても議論されるべき点がある。

前章での検討を踏まえれば、クラシック・ロックのフォーマットにおいて、パンクは放送されにくいのではないと思われる。上記の134曲のリストにはクラッシュが入っ

ており、「Classic Rock Roll of Honor Awards」では2011年にダムドが「Outstanding Contribution」を受賞しているが、パンクの代名詞ともいえるセックス・ピストルズはどこにも言及されていない。1970年代末の時代性を考えれば、パンクはもっと大きな扱いになっていて良いはずだ。また、黒人グループはもちろん、1970年代後半に大きなブームを起こした白人グループであるビージーズなどを含め、ディスコ音楽が慎重に排除されていることも見過ごせない。

また、例えば、1970年代半ばに世界的ブームを起こしたベイ・シティ・ローラーズが、クラシック・ロックとして扱われる可能性は低いように思われる。それは、このバンドのアイドル性からファン層がもっぱら女性に偏っていたこと、演奏に関する真正性の欠落などが理由となろう。さらにMTV時代に入った1980年代半ばの第二次ブリティッシュ・インヴェイジョンの時期のデュラン・デュラン、カルチャー・クラブ、ワム!、スパンダー・バレーなども、クラシック・ロックとして扱われる可能性は低そうだ。

クラシック言説と「正統性」

増田聡(2007)は、「むしろ、音楽としての「クラシック音楽」が衰退することと反比例するかのよう、その影響力がほかの音楽にも広がっているのではないか、というのが、本章で述べようとする主張である」と論を起こし(増田, 2007, pp.50-51)、音楽言説としての「クラシック」が、ポピュラー音楽分野の音楽についても動員されることを指摘している。「すなわち、「クラシック」概念は、音楽において「古典的なもの」こそが「高級」である、とする志向を反映したものとしてある」のだという(増田, 2007, p.54)。

増田は、藍川由美や鳴海史生の言説を例として、クラシック音楽ではない日本歌曲やビートルズ作品への評価の言説にも、このようなクラシック言説が大きく影響していることを指摘する(増田, 2007, pp.55-64)。「いうまでもなく、そのような「正統性」への欲望は資本主義と共振する。テオドール・アドルノがある意味で喝破していたとおり、クラシック音楽とは文化産業が生み出した「高尚な見かけ」をウリとする音楽商品の別名でありその意味で二十世紀が生み出した「ポピュラー音楽」の一つである、ということもできるかもしれない。両者を区別するのは、それが「クラシック」言説の中で「正統化」され、「高尚な音楽」に分類されるか否かによる。」(増田, 2007, pp.64-65)。

そして、増田のこの指摘は、「高尚な音楽」に分類されない音楽の中にも、入れ子構造のように「正統化」されるものとそうでないものが生み出されることをも意味しているはずである。商品としての売り上げとは異なる尺度として「本物のロック」なり「本物のブルース(その他)」を求める心情は、クラシック言説の重力圏の内にあるといえるだろう。たとえそれが、ロバート・クリストガウのいう「ドアーズの秘儀めいたミドルブrou的な逃避主義や、レッド・ツェッペリンの威勢のいい誇大妄想的壮大さ (the Doors' mystagogic middlebrow escapism and Led Zep's chest-thumping megalomaniac

grandeur)」のような、「高尚／ハイブロー」ならぬ「ミドルブロー」に過ぎないものであったとしても、それは何らかの「本物」さ、「正統性」を少なからぬ聴き手に感じさせるのである¹⁴⁾。

クラシック・ロックを生んだもの

吉成順(2014)は、今日的な意味での「ポピュラー音楽 (popular music)」概念¹⁵⁾が成立する以前に、用語としての「popular music」がいかなる意味で使用されていたのかを、19世紀のヨーロッパ、特にロンドンにおけるプロムナード・コンサートなどで取り上げられた楽曲の分析から検討している。吉成は、18世紀のロンドンでヘンデルなどバロック期の作品が「古い音楽 (ancient music)」として注目されたことを指摘した上で、「…そのことと、ここで言っている「古典の成立」とは別のものと捉えなければならない。「古くて価値がある」という意識は共通しているとしても具体的な対象が異なっている…」と述べている(吉成, 2014, p.266)。そしてウィリアム・ウェーバーを援用しながら「クラシック音楽 (classical music)」という概念が1810年頃に成立したという見解を示している(吉成, 2014, pp.266-267)。その上で、「classical music」と「popular music」という用語の使用例が、19世紀半ばから並行して増加していったことを新聞記事データベースの分析から明らかにした(吉成, 2014, pp.272-274)。

さらに具体的な検討を重ねた上で、吉成は次のように述べる。「一九世紀はじめには「古典」としての“classic”概念が生まれてくるが、その対象は特定少数の選ばれた作曲家に限られていた。一方一八五〇年代後半になるとチャペルの本などの影響もあって“popular music”が「理解しやすい」「新しく」「民衆向きの」音楽カテゴリーとして確立し、その後はミュージック・ホールのような専用の会場を得てさらに発展していく」(吉成, 2014, p.288)。吉成は、「popular music」概念の確立が、それに当たらない多くの音楽を「classical music」へと定位させ、「クラシック音楽」を「増殖」させたのだと結論付けている(吉成, 2014, pp.288-290)。

以上のような吉成の議論を援用するならば、「クラシック・ロック」は、新たな、いわば「ポピュラー・ロック」とでも称すべきものの出現によって必要とされたジャンルであったという見通しが立てられる。もしこのような見通しが正しいとすれば、「ポピュラー・ロック」が何であったのかを考えてみる必要がある。もちろんその答えは単数形である必要はない。パンク、グランジ、ニューロマンティック、オルタナティヴ、あるいは、ヒップホップやテクノ、EDM等々が既存のロックを乗り越えていこうとする状況の中で、あるいはデジタル技術が音楽を変えていこうとする中で、アナログなギターとボーカルを軸とした「ロックの王道」を主張し、「古典」を確立させようとする動きが「クラシック・ロック」を生んだのである。

おわりに

今やインターネットの時代に入り、音楽はCDではなくネットからのダウンロードによって消費されることが多くなった。さらに、YouTubeをはじめ、多様なサイトが多様な音楽を無料で供給している。ロングテール需要は、さらに零細なレベルまで伸び、歴史的な音源も、最新の音源も、いわばフラットな状況で聴き手の前に提示されている。

美術の世界では、フェルメールやファン・ゴッホのように、生前にほとんど、あるいは、全く評価されなかった作家の作品が、後年に高く評価されるという現象がしばしば起こる。もちろん音楽の世界でも同様のことはあり、中には『アルビノーニのアダージョ』のようなことさえ起こる訳だが、作品の新旧、評価と無関係に、ネット上にフラットに提示された音源は、映画『少年メリケンサック』（2009年）に描かれたようなストーリーが現実展開する可能性を高めている。これはまさしくポストモダンの状況に他ならない。

「クラシック・ロック」は、そうした中で「古典」であること、それゆえに尊い存在であることを主張する。しかし、シューカーやクリストガウが示唆するように、ロック音楽が白人男性主義的な文化装置であるとすれば、「クラシック・ロック」は、ロック音楽の起源におけるリズム・アンド・ブルースのパフォーマーや、黒人ロッカーたちの存在を「オールディーズ」という名の「前史」として封印する、あるいは、多様な可能性を秘めた実験が行われたビートルズを、いわば「バロック」として、選択的にのみ「クラシック・ロック」に含む、という危うさを含んだ概念であるということになるだろう。もちろんジェンダー的な偏りは言わずもがなである。

今後、「クラシック・ロック」という概念が、吉成が説明するようなメカニズムの中で時間の経過とともに「増殖」していくのか、あるいは、1970年代における「プログレッシブ・ロック」＝「先進的なロック」が、あたかも進化の行き詰まりのようにそのまま一つの様式として演奏され続けてきたように、特定の時代に固有なジャンルの呼称となっていくのか、安易な予想はしない方が賢明だ。しかし、ベビーブーマーたちがこの世を去ってしまった時点で「クラシック・ロック」がどのようなものになっているのか、空想してみることは一興であろう。

【註】

（以下で言及するサイトの内容は、2018年1月10日に最終確認した。）

1. 小倉は文教大学教授であり、この講演記録は2009年12月12日に同大学の行事である第32回ベスタロッヂ祭で行われたものである。

<http://www.koshigaya.bunkyo.ac.jp/kyo-kyoshoku/32ogura.pdf>

2. 例えば、1974年1月16日付の読売新聞・夕刊9ページには「ブームのクラシック・ロック」と題した記事があり、オランダのフォーカスとイタリアのPFMが紹介されているが、これはクラシック音楽を取り入れたロックという意味での「クラシック・ロック」の用例である。

また、1976年にはロンドン交響楽団とロイヤル・コーラル・ソサエティがロックの楽曲をオーケストラ編成に編曲して収録した『クラシック・ロック (Classic Rock)』という LP アルバムが出ており、その好評を受けてシリーズ化され、1990年にはシリーズを5枚のCDにまとめたボックスセットもリリースされている。

しかし、このようなクラシック音楽を取り入れたロック、あるいはロックの楽曲をオーケストラで演奏するといった意味では「クラシカル・ロック (classical rock)」という表現の方がより一般的であろう。

3. ロックは死なず！いま聴きたい「クラシックロック」10選(前編)
<https://funmee.jp/articles/bca6866ccbcf2aafa65f3f058203570460b1e351>
ハートに火をつけて！いま聴きたい「クラシックロック」10選(後編)
<https://funmee.jp/articles/f73cfdedccbcdbdf28959437e7acf712bb9205408>
4. The Greatest Classic Rock Bands
<https://www.ranker.com/crowdranked-list/greatest-classic-rock-bands>
5. Top 100 Classic Rock Songs
<http://ultimateclassicrock.com/tags/top-100-classic-rock-songs/>
6. バンドの場合、重要なメンバーが異なる国出身であるケースは、「その他」として集計した。例えば AC/DC はもともとオーストラリアのバンドであるが、現在のボーカリストであるブライアン・ジョンソンは英国人であり、「その他」として数えている。ただし、各バンドのすべてのメンバーの国籍を詳細に追究はしていないので、見落としがある可能性も残っている。
7. 1963年に英国でメジャー・デビューしたビートルズは、1964年2月に米国に渡り、ブームを巻き起こした。米国のレコード会社各社は、英国のバンドを競うように米国市場に紹介し、1960年代半ばには英国勢が米国のヒットチャートに多数登場することとなった、このような状況を「ブリティッシュ・インヴェイジョン(英国勢の侵略)」と称した。
8. Mag ABCs: 137 out 516 consumer mags put on circ year on year, full breakdown
<http://www.pressgazette.co.uk/just-137-out-516-uk-consumer-magazines-put-sales-year-year-full-breakdown-all-titles>
9. 名称としては「The Classic Rock Awards」が用いられることもあったが、いずれにせよ2017年には実施されていないようである。
10. メタル系のバンドが「メタル・グル」以外の賞を受賞しないという訳ではない。メタリカは2008年に「最優秀リイシュー」、2014年に「DVD/ フィルム・オブ・ザ・イヤー」を受賞しており、アイアン・メイデンは、2006年に「アルバム・オブ・ザ・イヤー」、2009年に「バンド・オブ・ザ・イヤー」、2015年に再度「アルバム・オブ・ザ・イヤー」を受賞している。
11. 「The Classic Rock Awards + Live Performance」と銘打って2016年11月11日に両国国技館で行われたイベントは、事前の告知でジミー・ペイジとジェフ・ベックの共演が行われるかのように大きく宣伝されていたにも関わらず、ジミー・ペイジはプレゼンターとして登場しただけで演奏をしなかった。この一件で、主催者側は入場料の返金に応じることとなり、また、その責任の一端がペイジにあると広報したことについての訴訟も起こされた。
その後、主催者側は2017年のイベントを再び東京で行うと告知したが、これは実現しなかった。
<http://classicrockawards.jp>
12. モット・ザ・フープルのイアン・ハンター、ブラック・サバスのトニー・アイオミやオジー・オズボーン、フリートウッド・マックのピーター・グリーンなど、所属したグループが上述の136組に含まれていた13組のバンドのメンバーについては、含んでいない。また、デヴィッド・ボウイの共同作業者であったミック・ロンソンや、オジー・オズボーンの共同作業者であったザック・ワイルド、ブルース・スプリングスティーンのE ストリート・バンドに所属していたニルス・ロフグレ

ンについては事実上バンドの一員であったと判断し、ここでは挙例していない。

13. 「AOR」というジャンル名は、日本ではもっぱら「Adult-Oriented Rock」と了解されている。しかし、「Adult-Oriented Rock」の意味するところは、「Album-Oriented Rock」と同義、ないしは、同じく 1970 年代後半に流行したいくつかのロックのスタイルの呼称とされており、必ずしも明確ではない。ここでは「Album-Oriented Rock」の意味で「AOR」を用いる。
14. それは「本物」のブルースやリズム・アンド・ブルースから剽窃されたレッド・ツェッペリンなどの歌詞や、疑似宗教的なほのめかしに満ちたイエスなどの歌詞にも当てはまる。
しかし、他方では、より「高尚」にこれを考究しようとする議論も確かに存在している。例えば、林(2013)の第2章、第3章などを参照されたい。
15. 今日的な意味での「ポピュラー音楽 (popular music)」について、山田(2003, p.9)では、「「ポピュラー音楽」とは、大量複製技術を前提とし、大量生産～流通～消費される商品として社会の中で機能する音楽であり、とりわけ、こうした大量複製技術の登場以降に確立された様式に則った音楽である」という操作的定義を提示した。もちろん吉成の議論は、それ以前の時代を対象としたものである。

【文献】

林 浩平(2013)：『ブリティッシュ・ロック』講談社, 254ps.

ピーターソン, リチャード(川島漸・山田晴通 訳) (1990=2005): なぜ, 1955 年だったのか? : ロック音楽の出現を解き明かす. 人文自然科学論集(東京経済大学), 122, pp.135-176. (原著 Peterson, Richard (1990): Why 1955? : Explaining the advent of rock music, *Popular Music* (Cambridge University Press), 9-1, pp.97-116.)

増田 聡(2005)：「クラシック」によるポピュラー音楽の支配構造, 渡辺裕・増田聡・編『クラシック音楽の政治学』青弓社, pp.49-81.

山田晴通(2003)：「ポピュラー音楽の複雑性」, 東谷護・編『ポピュラー音楽へのまなざし』勁草書房, pp.3-26.

吉成 順(2014)：『〈クラシック〉と〈ポピュラー〉』アルテスパブリッシング, 325ps.

Shuker, Roy (2016): *Understanding Popular Music Culture, Fifth Edition*, Routledge, 298ps.